

傍廂 齋藤彦麻呂

傍廂糾繆 岡本保孝

ねざめのすさび 石川雅望

埋齋隨筆 志賀理齋

化月草紙 松平定信

1

日本隨筆大成

第三期

吉川弘文館

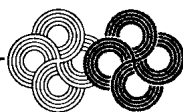
日本随筆大成 第三期 第一卷
昭和四年六月十五日発行

編纂者 日本随筆大成編輯部

代表 早川純三郎

発行者 桜井庄吉

発行所 日本随筆大成刊行会



日本随筆大成

〈第三期〉1

昭和五十一年十月五日 印刷
昭和五十一年十月二十日 発行

編者 日本随筆大成編輯部

発行者 吉川圭三

発行所 株式会社 吉川弘文館

〒113 東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三一九一五(代表)
振替口座東京〇一二四四番

製作 株式会社 たんちょう社

解題

本集には、傍廂、傍廂糾繆、ねざめのすさび、理斎随筆、花月草紙の五種を収める。

傍廂 二篇

斎藤彦麻呂 著

本書は、前後の二篇に分たれる。書名の由来並びに著作の動機などについては、嘉永六年八十六の歳に成ったその自序によって知られる。江戸浜町の住居に添えて建てられた小屋に於て、暇々に草したものだったという。内容は、古来の制度・風俗・古言古歌その他よりして考証的な記事にも及んでいる。しかしその学問的な題目を扱った条々には、杜撰な説が多いとして、後に岡本保孝の「傍廂糾繆」の一書が作られるに至っている。些事であるが、本書中の「かまぼこ かばやき」の条と全く同文ではないが、ほぼ同様のことが、同じく彦麻呂の著書である「神代余波」(弘化四年秋の自序がある)にも書かれている。森銑三編随筆解題には、彦麻呂の人物には癖があったところから、そうした性格が、この随筆にも反映していることが指摘せられているがうなずかれる。

所収本は「百家説林」によったよし、旧大成本の凡例に記されている。本書には木版本があつて、それも普く流布している。重刊に当り、内閣文庫蔵版本、国会図書館蔵万延二年版本により校訂した。

斎藤彦麻呂は国学者。宮川舎また葦飯庵の別号がある。明和五年正月五日三河国矢作に生まれた。寛政元年二十二歳で安田躬弦等の催した花歌合百番に参加していることが、「神代余波」に見えてい

る。伊勢貞丈、本居宣長、賀茂季鷹等について学び、前出の書の外に、なお数多の著述がある。その外にも自筆の多くが、静嘉堂文庫に蔵せられている。嘉永七年（安政元）三月十二日に歿した。八十七歳。江戸麻布今井町法音寺に葬られている。

傍廂糾繆 かた びさし きゆう びゆう

一卷

岡本保孝著 おかもと やすたか

斎藤彦麻呂の「傍廂」は、江戸時代に刊行せられた随筆の一として認められているのであるが、その内容には誤謬多しとして、岡本保孝がこの一書を著して、それらの一々を訂している。保孝はその巻首に、瓦礫にひとしき書に、糾繆は益なき事なりと、先師浜臣がいつていることをも一言し、その教に背いてこの書を著したことを述べている。

保孝自筆の稿本によって、旧大成に収めたらしいが、今回改めて「況斎随筆」第十五の稿本（国会図書館蔵）をもって校定して、小誤謬を訂した。国書刊行本の「百家随筆」にも本書は収められているが、交易の条に蕤荷生薑の文が入り、交易の条が脱落している。

なお保孝その人については、本大成第二期第二十一巻収載の丸山季夫氏の「難波江」の解題を参照せられたい。

保孝の著作には、まだ稿本のままで伝えられているものが極めて多いことをも序に附言して置く。

ねざめのすさび 三巻

石川雅望著 いしかわ まさもち

著者の石川雅望は、宿屋飯盛の狂名でも知られている江戸の狂歌師で、六樹園とも号した。狂歌の伎倆は嶄然儕輩をぬきんでいたのであるが、然も一面優れた国学者で「源註余滴」「雅言集覧」な

どの大著をも成している。本書はその雅望の随筆で、古典の一節を引いて、その中の語句についての私見を述べている。学者としての雅望の蘊蓄の一端を知ることの出来る好著といつていい。源氏物語を引くところの多いのは、同物語語について、雅望の特に造詣するところの深かったからに外ならない。本書は久しく写本として伝えられていたのであるが、明治になって「百家説林」に収められて活字本となった。所収本はその「百家説林」によったよしが旧大成本の凡例にみえるが、それは井上頼図博士の所蔵本に拠ったのであった。重刊するにあたって内閣文庫、国会図書館所蔵の写本と比較し内閣本によって「廓の花をみし詞」の一文を補った。著者自筆の原本は今早稲田大学図書館に蔵せられているのであるが、それは参看することを得なかつたことを断つて置きたい。

なお著者雅望については本大成第一期第五巻に収むる「都の手ぶり」の解題を一見せられたい。

理 齋 随 筆 六 卷

志^し賀^か 忍^{しのぶ} 著

本書の著者の志賀理齋は、幼少の頃からの書物好きで、和漢の書籍よりして、草双紙のようなものを漁り読んだ。そして、会心の条項は、自ら録写して備忘に備えた。古稀の齢を過ぐる頃には、その抄録が凡そ百巻にもなつていたという。その中から更に抄出して一書としたのが本書で、内容は史上の人物の逸事から、文学、風俗、医療のことなどの広汎にわたつてい、中には滑稽味のある記述などもあつて、通俗的ではあるが、甚だ賑かな一書を成している。著者の生前に刊行せられて居り、それには三男柳川重信の筆になる挿絵を加えて、更に興趣を豊かならしめている。文政六年の馬島安節の序、同七年杉本良、そして天保八年の子息徳齋の序が附せられてい、著者の副言がある。本書につづいて二・三編各六巻を公刊する予定であつたけれども、それらは出ずにしまつたらしい。奥附に

は、「二編全六卷在刻」「三編全六卷近刻」とした予告がある。活字本も幾つか作られている。

著者理斎の略伝は、第二期第十六卷所収「三省録」の丸山季夫氏執筆の解題を参照せられたい。

花月草紙 六卷

まつだいら
松平定信 著

松平定信は、江戸時代を通じての儒教主義の政治家であり、兼ねて国学者であり、且つ趣味の人でもあった。本書はその人の随筆で、定信の生前に刊行せられ、爾後広く行われて今日に至っている。それで江戸時代に成った随筆の代表的なものの一に数えられるのであるが、予め刊行することを予期して作った書物であるからであらうか、あまりに改まった態度で物をいっているといった感じの伴うものがあり、教訓的な色彩が強い。定信の随筆は本書の外にもなお多数伝えられて居り、それらは松平家蔵版の「楽翁公遺書」の内に収められている。その内の「退閑雜記」などは、本書などよりも自由な態度で記述せられていて、興味のある条々の多いことを、ここに一言して置こう。

著者定信については、本大成第二期第四卷に収むる「閑なるあまり」並びに第一期第七卷「心の双紙」の解題を見られたい。

なお本書の原本は、定信自ら版下を書いて居り、表紙なども定信の好みによって作らせた特別の紙を使っている、書物としての出来の甚だよい一事をも附記して置くこととする。

重刊にあたり、内閣文庫蔵自筆写本により文化十三年の自序を加えた。

(解題 小出昌洋)

目次

傍廂	一
傍廂糾繆	一五
ねざめのすさび	一五
理齋随筆	三五
花月草紙	三七

(解題 北川博邦 小出昌洋)

傍

廂

おのれいまだ若かりしころ、始めての火の災に住どころやけぬれば、河のべの浜町のほとりの、蘆ぶきの屋にしばし住ひける頃、かりそめに葦の仮庵と号けつるが、思はずひろごりて、とほきさかひの人もしることゝなりにたれば、もとつ住かにかへりても、猶かふべくもあらず。そがまゝにさし置きつゝ、かたへにいさゝか立てそへして、ふづくゑおく所として、傍廂となん号けぬる。かくていとまあるをり／＼に、くさ／＼のあげつらひ書どもあらはしつる草稿の中より、いさゝかとり拾ひて、たゞにかたびさしと名おほせつるが、つぎ／＼につもり／＼て五十巻にもあまりぬるを、又さらにこゝかしこぬきがきして木にゑらせたり。えうなきたはわざとはしりながら、猶いけらん世の老のこゝろなぐさに、いたづらなるたは言書きつゞけぬるになんありける。

嘉永六年の秋

八十六翁

斎 藤 彦 磨

目次

前 篇

白 はくしゅ 酒 しゅ	に く き もの	披 ひ 風 ふう	如 に 意 い	か ま ぼ こ	尺 さく 八 はち の みえ 笛	ゆ かり の いろ	鬼 おに に た と ふ	ふ る と し	和 わ 詩 し	お かし を かし	瘡 かさ 開 ひ	曾 そ 我 が の あ だ う 討 うち	武 ぶ 勇 ゆう 諍 しやう 論 ろん	ひ め は じ め
黒 こくしゅ 酒 しゅ				か ば や ぎ										へ 巻 之 二

三	三	元	元	元	六	七	七	六	六	五	五	五	四	三
霞 かすみ 時 とき 雨 くれ	お も し ろ き	寿 ことぶき の なが 長 みじ 短 か	南 な 無 む	役 えん 行 のぎやう 者 しや	藁 めうが 荷 しやう 生 が 薑 しょう	交 かう 易 えき	五 ご 畜 ちく 六 りく 畜 ちく	鈴 すず 虫 むし 松 まつ 虫 むし	小 せう 女 じよ 狼 おほ を ころ す	孩 がい 子 し 蛇 へみ を ころ す	隅 ぐも 田 だ 川 がは	国 こく 初 しよ	九 く 年 ねん 母 ぼ	大 だい 工 くわん 左 さ 官 わん

嘉定祝かぢやういはひ
冬ふゆのなでしこ

寵つんぽ

聾つんぼ

坊主ぼうず

やよ

延齡えんれいはこのましきもの

似顔にがはな絵

簾はしき木

重言かさねことばの略はぶきぶり

菊きく

ながらへ

髮髭かみひげを墨すみにて染む

花はな

かつを

神かみの御姿みすがた

すり はたご こり

雛ひな

江戸人えどひとの勇氣ゆうき

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

庚申かうしん狂歌きやうか

神位しんゐ

一筆ひとで

養目ひきめ簞かば

墨引すみひき薪たきぎ

まつらさよ姫ひめの石いしになりたる

鎗やうり

単物ひとへもの帷子かたびら

桶箱かづ

円位えんゐ上人じやうにんの杖つゑ

私わたくしの官位くわんゐ

脇草へきぐさ

非理ひり法はふ權天けんてん

屠蘇とそに烏頭うづづを加ふ

夢ゆめあはせ

正月しやうぐわつ事始ことはじめ

握符あくふ

そり かじき

つかふと、つかはるゝとのけぢめ

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

四

五

五

五

五

石の鏃いしやじり
 国分寺こくぶんじ
 いろは文字いろはもじ
 広成の失ひろなりしつ
 強盗と名の付たるに異なる人かうたうとなのつきたるにことなるひと
 灰はい 零ふり
 けゝれ木
 くだかけ
 作者の名さくしやな
 万物ばんぶつ
 得たるわざえだつたるわざ
 韃靼国だたんこく
 夜鷹よたか
 毒物どくぶつ
 郭公ほととぎす
 からすの鳴声けんたうめいぎ
 劔刀名義けんたうめいぎ
 唐音たうみん

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

普請作事ふしんさくじ
 神罰しんばつ
 言をいさゝかかへて、心をいたくかへたことばをいさゝかかへて、こころをいたくかへた
 る歌うた
 手のよしあしの論あげつらひ
 くちづたへ
 御位争みくらあらしひ
 ちん犬
 さくなだり
 しぬる薬くすり
 朝な夕なあさなゆふ
 鮠尾槍なまづのむねほこ
 顔色土の如しがしよくち
 神社の星祭じんじやほしまつり
 神の使かみつかひ
 羽倉在満翁の真蹟はぐらありまろをうしんせき
 極楽地獄の絵ごくらくぢごく

𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎

俗画	胡蘿蔔	蛙掛	実名を音にて唱ふ	年忌	水草	幸矢拔	和歌四天王の異名	植物の虫	諱	大行天皇	鎌倉長吏定書	稲穀	おしねとをしねとは異なり	言を信じて人をしらず	猫	人名の魚	水仙山	八神殿の焼失

九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九

三十六言の歌	詞不可疑	熱田社	月に星九曜	行燈挑燈	大人小人の国	絵そらごと	鳥のせうやうもの	勅勘勅許	三脈の法	鉄砲鍛冶の国友	こほろぎきりぐす	四大橋	小石を妊娠のまじなひとす	義士の難陳	驚草	葵を簾に掛	にげ水	那波道円
--------	------	-----	-------	------	--------	-------	----------	------	------	---------	----------	-----	--------------	-------	----	-------	-----	------

二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇 二〇